

研究推進校事業報告書

<取組と成果のポイント>

今回、生徒の意識を高める授業スタイルと評価方法の工夫の二点について研究を進めてきた。

①授業スタイル（北中スタイル）について

授業での学びをその後自分のこととして考えられないという現状を改善するために「テーマ発問」を授業の中で取り入れていくこととした。

導入→展開前段（資料発問）→展開後段（テーマ発問）→振り返りの四段構成を基本とした授業展開を北中スタイルとし、研究授業を繰り返し行った。

②評価の工夫

評価については「OPP（One Page Potfolio）シート」を用いた実践を繰り返した。授業前と授業後に同じ発問をし、その中で考えがどう変化していくかを教員、生徒ともに見られるようにした。

1月に行ったアンケートでは「道徳の授業が好き（生徒）」「生活の中で授業で学んだことを思い出す（生徒）」「評価の工夫をしている（教員）」など多くの項目で改善が見られた。また校外でのボランティア活動に参加を希望する生徒が増えたり、生徒会が校外でのあいさつ運動を企画したりと生徒たちが道徳的実践の場を求めて動き出す姿が見られた。これらは今回の研究の成果と言える。

1 研究推進校（又は推進地域）の概要

学 校 名	所 在 地	電 話 番 号	児 童 数	備 考
幸田町立北部中学校	額田郡幸田町相見越丸36番地	0564 (62)9451	449人	

2 研究課題

（１）教員の道徳授業の指導力向上

- ・生徒に心で感じとらせるための授業スタイルの工夫
- ・生徒の良さを伸ばすための評価方法の工夫

（２）生徒の道徳的判断力・実践力の向上

- ・生徒会活動を核とした道徳と関連させる教育活動の構想と実践
- ・地域社会の中で道徳的判断力を育む活動の計画、実施

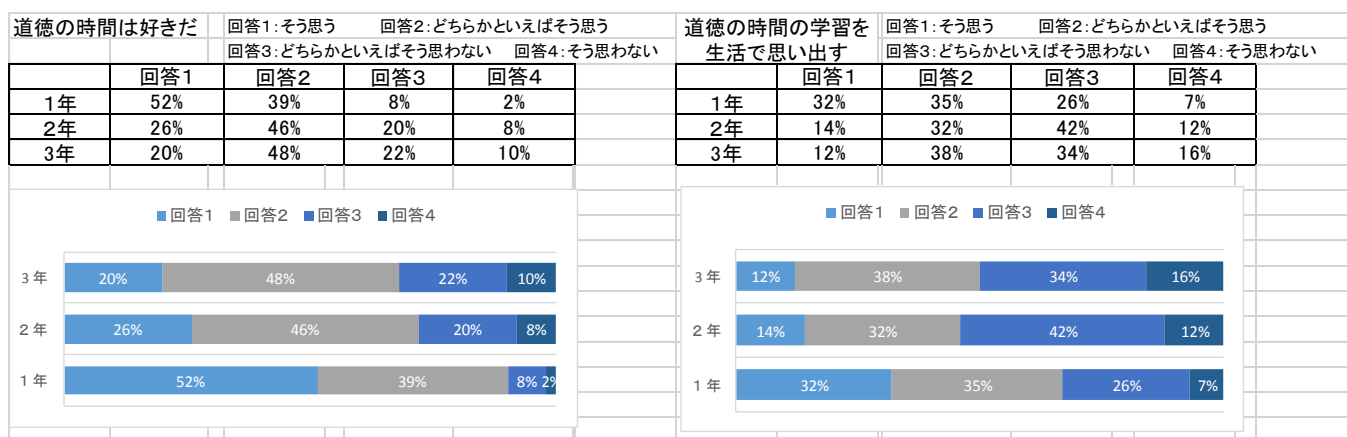
3 研究主題とその設定理由

（１）研究主題

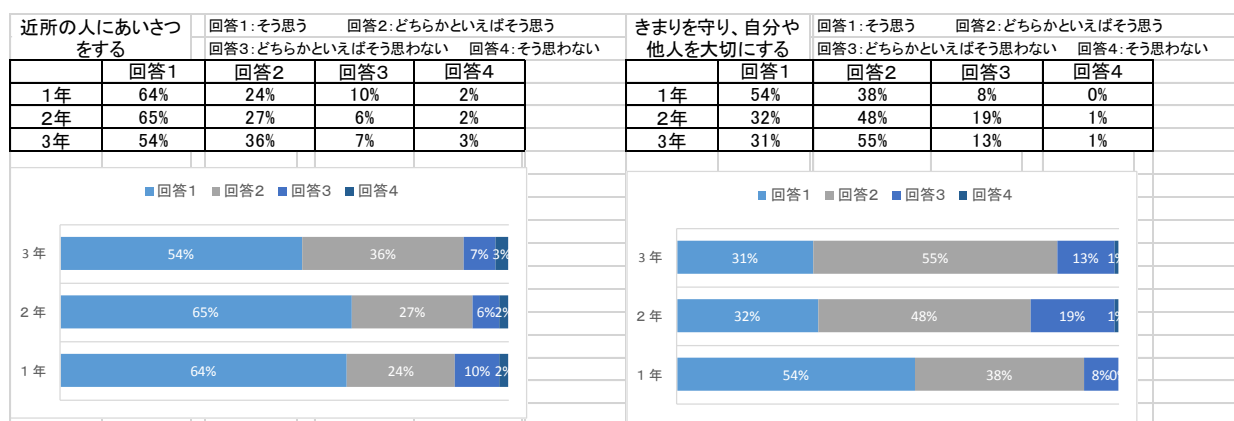
学びの中から心で感じ、行動できる生徒の育成
—日常生活における道徳的実践力を育む指導・評価方法の工夫—

（２）主題設定の理由

本校では、教育目標「知・徳・体の調和のとれた、本気になって取り組む生徒の育成」をめざし、「信頼を基盤とした学校づくり」と「生徒の力を生かした学校運営（生徒自治）」を学校経営方針として教育活動を進めている。とりわけ「一生懸命はかっこいい」（生徒会スローガン）や、「あいさつ、歌声、無言清掃」（北中3本柱）を定め、生徒自らの力で学校生活をよりよいものにしていく活動に力を入れている。道徳教育においてもこうした流れを受け、生徒会活動との連携を重視しながら、道徳の全体計画に基づき、すべての教育活動において道徳的実践力の向上を図れるよう取り組んでいる。今年度行ったアンケートでも地域の人にあいさつをしたり、きまりを守ったりする生徒が多く、地域や学校の中で道徳的実践へと動き出す生徒が育っていると考えられる。



ところが、全校生徒を対象に道徳の時間に関するアンケートを取った結果、「道徳の時間が好き」「道徳の学習を生活で思い出す」の項目において気になる結果が見られた。



この2項目で「と思う」と答えた生徒は1年生と2、3年生で大きな差が見られる。今年度の初めにアンケートを実施したため、1年生は小学校時、2、3年生は昨年度の道徳の授業を想起していると考えられる。ここから、中学校での道徳の授業の中で「好き」とか「生活の中で思い出す」生徒が減っている状況が顕著に表れており、その原因は、資料で扱う道徳的価値を考えたり、話し合ったりする時間が少なく、話し合いが生き方に結びつく議論になっていないことと考えた。ここから、「話し合う時間の確保」や、身につけさせたい価値に迫る「テーマ発問」を授業の中に取り入れることが必要であると考えた。

一方、教職員を対象に行ったアンケートでは「生徒にとって道徳は自己を見つめる機会となっ

	生徒にとって「道徳」が自己を見つめる機会となっている			
	回答1: と思う	回答2: どちらかといえばと思う	回答3: どちらかといえばそう思わない	回答4: そう思わない
教職員	34%	58%	8%	0%

ている」の項目で「と思う」「どちらかといえばと思う」と答えた教職員は92%に上った。つまり、教職員は道徳の授業にある程度の手応えを感じているが、生徒はそう感じていない現状がある。ここから、教職員の「道徳」の授業に対する意識の改革、生徒の意識を高める授業スタイルの工夫が必要であることが分かった。

また、教職員のアンケートで最も自信を持っていない項目が「評価の工夫をしている」という項目である。

	評価の工夫をしている			
	回答1: と思う	回答2: どちらかといえばと思う	回答3: どちらかといえばそう思わない	回答4: そう思わない
教職員	8%	12%	42%	38%

「どちらかといえばそう思わない」「そう思わない」と答えた教職員が80%に上った。中学校では平成31年度から「特別の教科 道徳」が実施される。教科化に向け、

教員が自信をもって評価を進めていけるようにするため、評価方法の検討は必要不可欠である。

現状の課題となる「話し合いの時間の確保」や「テーマ発問」の設定、「生徒の意識を高める授業スタイル」、また「評価を工夫する」ことで生徒の道徳的実践力は今よりもさらに伸ばすことができるのではないかと考える。これらの分析から、目指す生徒像及び目指す教師像を、次の「研究の概要」に示したように設定し、道徳の時間の指導改善を中心とした研究に着手することにした。

4 研究の概要及び特色

(1) 目指す生徒像

- ・授業の中で自己の考えを広めたり、深めたりする中で、自らの価値観を再構築できる生徒
- ・生活の中で、道徳的实践へと動き出す生徒
- ・自己評価を通して、自己をさらに良くしていこうとする生徒

(2) 目指す教師像

- ・生き方を考え、動き出すための支援となる授業を展開できる教師
- ・あらゆる生活の場面で、道徳での学びを引き出すような支援ができる教師
- ・生徒が伸びていくための適切な評価方法を考え、実践できる教師

(3) 研究仮説と手だて

【仮説 1】
生徒同士が授業の中でかかわり合う力を身に付けることで、道徳の授業の中で、積極的に意見を言ったり、他者の意見をしっかりと聞いたりして、自らの価値観を再構築することができるだろう。

→【仮説 1】に対する手だて

- ・生徒が安心して意見を言うことができる学級づくり
- ・各教科や朝の会、帰りの会の中での「話す・聞く かかわり表」の利用

「話す・聞く かかわり表」		
関わり度	話 す 立 場	話 を 聞 く 立 場
関わり度 1	・手をまっすぐに挙げる。 ・大きな声で返事をする。 指名されたら「はい」	・話をする人を見る。
関わり度 2	・教室中に聞こえる声で話す。 「・・・です」 「・・・と思います」 ・教室のみんなの方を向いて話をする。	・自分の考えと比べながら、話を聞く。
関わり度 3	・意見の理由や根拠も話すことができる。 「・・・だから・・・と思います」 「教科書の○ページの・・・から考えて・・・だと思います」	・メモをとりながら、話を聞く。
関わり度 4	・質問や付け加えなど、友達の意見と比べて発言する。 「・・・という意見に賛成で・・・です」 「・・・という意見に反対で・・・です」	

- ・ほっとタイムの定期的な実施によるかかわり合いのレベルアップ

「ほっとタイム」とは H...HOT（熱い）
 O...OPINION（意見）
 T...TRAINING（訓練）

- ・安心して自分の意見を言う中で、話し合いでかかわり合えるように練習をする時間
- ・テーマに沿って討論を行う
（テーマ例：タイムマシンがあったら行きたいのは過去か未来か）

【仮説２】

生徒が道徳の授業の中で考えを深められるような発問や授業展開をすることで、自分自身のことに置き換えて深く考えるようになるだろう。

→【仮説２】に対する手だて

- ・道徳の授業の中で発問の数を厳選することによる「話し合う時間」の確保
- ・導入→展開前段（資料での発問）→展開後段（資料から離れてのテーマ発問）→まとめの４段構成を基本とした授業スタイル（北中スタイル）

【仮説３】

振り返りの仕方や評価の方法を工夫することによって、自らの成長を自覚するとともに、自己を見つめ、さらによくなるためにどうすべきかを考えるようになるだろう

→【仮説３】に対する手だて

- ・本時の授業に即した振り返りの実施
- ・OPPシートの活用によるポートフォリオ評価で自己を振り返る機会の確保
- ・振り返りの視点の明確化

【仮説４】

道徳的实践の場を与えたり、日常の中で教師が道徳とつながるきっかけになる支援をしたりすることで、授業での学びと日常生活が結びつき、道徳的实践へと動き出すようになるだろう。

→【仮説４】に対する手だて

- ・生徒会活動や地域社会との連携による実践の場の確保
- ・担任による、日常生活を振り返る支援

(4) 全体構想

めざす生徒像（木）

- 授業の中で自分の思いを他者に向けて発信したり、他者の意見を受信したりして、自己の考えを広めたり、深めたりできる生徒（幹を太くする）
- 生活の中で、積極的に道徳の授業での学びを生かそうとする生徒（枝を増やす）
- 自己評価を通して、自己をさらに良くしていこうとする生徒（葉を増やす）

葉：道徳的实践による生徒の満足感

枝を増やし、葉を広げるための手立て

○道徳的实践の場の確保

- 生徒会活動や地域社会との連携
- OPPシートの活用によるポートフォリオ評価で自己を振り返る機会の確保

枝：様々な道徳的实践

幹を育てるための手立て

○生徒が考えを深められる授業スタイルの工夫

- 発問の数を厳選し、話し合う時間の確保
- 導入→展開前段（資料での発問）→展開後段（資料から離れてのテーマ発問）→まとめ

幹：生徒の道徳的实践力

根を育てるための手立て

○生徒一人一人が生きる学級経営

- 自分の意見が安心して言える人間関係づくり
- 朝の会、帰りの会を利用した話す・聞くレベルアップ

根：学習規律、話し合う環境

（５）研究課題にかかわる取組

＜教職員の道徳の時間における指導力の養成＞

- ・外部講師による「道徳の授業」についての講演
- ・北中スタイルを意識した研究授業の実施
- ・学年部、研究推進委員における指導案検討の開催

＜生徒のかかわり合う力の育成＞

- ・「話す・聞く かかわり表」を意識した各授業の実施
- ・内容に応じた座席隊形や指名方法の工夫
- ・「ほっとタイム」による楽しくかかわり合う練習

＜学びから生活への生徒の意識のつなぎ＞

- ・地域でのボランティア活動の紹介・実施
- ・適切な評価方法の検討

５ これまでの取り組みと成果

（１）ほっとタイムの実践（仮説１に対応）

話し合いの中で積極的に意見を言ったり、他者の意見を聞いたりする力をつけるため、日々の授業では「話す・聞く かかわり表」を意識させた。また、学活の授業や朝の会、帰りの会などで定期的なほっとタイムの実践を行った。９月１５日には、全校一斉ほっとタイムの実践を行った。

テーマは各クラス様々で「朝食はご飯派？パン派？」「将来住むなら田舎？都会？」などについて自由に話し合った。どのクラスも学級リーダーが前で司会進行、板書を分担して行い、楽しそうな雰囲気で行っていた。意見を自由に出し合う中で「たしかにそうだな」「そういう考えもあるなあ」などのつぶやきも聞くことができた。どのクラスでも笑顔で話し合い、ほぼ全員が挙手をし、自分の考えを伝えようとする姿が見られた。

翌日の生活日記には「ほっとタイムが面白かったです。人の意見を聞くのって楽しいと思いました。また、ほっとタイムをやりたいです。」など、ほっとタイムを通して、意見を言うことの楽しさや人の意見を聞くことの楽しさを知った記述が見られた。

ここで行ったのは話し合いの土台づくりに過ぎない。こうした土台をしっかりとさせていくことで道徳の授業の中での意見の出し合いが活発になり、道徳的实践力を高めていくことにつながっていくことを期待している。今後も継続的に行っていこうと考えている。



＜各クラスのほっとタイムの様子＞

(2) 授業実践 (仮説2に対応) とOPPシート (仮説3) に対応

主題名 相手の理解と尊重【内容項目 B-(9) 相互理解、寛容】

ねらい 相手の立場に立って考えることの重要性を理解し、今後の対人関係の中で生かしていこうとする気持ちを高める。

〈本授業の指導案とOPPシート〉

展開 (50分) (キーワード: 相手の立場に立つ、気持ちの理解)

生徒の活動	教師支援・評価(…内)
1 家族や友人と付き合っていく上で大切なことについて考える。(授業前の考え)(3分)	・シートに記入させることで、授業前後の自らの意見の変容を知る場を設定する。
2 資料を読んで、あらすじを押さえる。(12分)	・全員が資料のあらすじを理解するために、「わたし」の考えを確認する場を設定する。
3 「わたし」がピッチャーとショートの両方の立場を経験して感じたことについて考える。(15分)	・生徒があらすじを押さえやすくするために、ワークシートに資料のあらすじを確認する箇所を設ける。
両方の立場を経験した「わたし」はどんなことを考えましたか。	
・優しい言葉をかけてもらえるとうれしい。 ・頑張っているのに怒られるのは嫌だ。 ・今までの私は自分勝手だったなあ。	・シートには記入させず、生徒が考えたことをその場で発言させていくようにする。 ・「わたし」の気持ちに迫るため、「わたし」になりきって考えるようにうながす。
4 本時で身につけさせたい価値について考える。(15分)	
人と接するときに大事にしていきたいことは何ですか。	
・相手の気持ちを理解すること。 ・相手の立場に立って物事を考えること。 ・自分がされて嫌なことをしないようにする。 ・友達に対してきつい口調で言うケンカになったので、相手の気持ちを考えて話すこと。	・シートに記入させ、自分の意見を深める時間を設ける。 ・日常生活で活かしていくために、経験に基づいた意見を机間指導の中で確認しておく。
5 家族や友人と付き合っていく上で大切なことについて考える。(授業後の考え)(5分)	家族や友人と付き合う上で大切なことを考える中で、相手の立場に立つことの重要性を理解できたか。
これからの生活の中で生かしていきたい。	



授業前、「家族や友人と付き合っていく上で大切なことは？」という問いに対して、この生徒は「人を傷つけない」という一つだけを書いた。その後、資料「プレーボール(明るい人生)」を通し、様々な立場で考えることは違うことを学んだ。その後、資料を閉じ「人と接するときに大事にしたいこと」を考えた。資料での学びにとどまらず、「私は吹奏楽部で先輩に厳しく注意されるより、優しく注意された方が理解できるから、相手の気

道徳 振り返りシート

9月16日

授業前

テーマ: 人と付き合う時に大切なこと

質問: 家族や友人と付き合っていく上で大切なことは何でしょうか?

人を傷つけない。

自分の考えの変化

授業後

テーマ: 人と付き合う時に大切なこと

質問: 家族や友人と付き合っていく上で大切なことは何ですか?

明るく、笑顔
相手のことを
よく考える。
人を傷つけない。
きつい言葉を
いわない。
優しく接する。

2年4組30番 名前()

授業ワークシート

題材名: プレーボール(明るい人生)

以前の「わたし」
○人にはいい顔を見せていても、心の中では文句を言いはなし
○控えめなピッチャー

↓

ショートをやることになった「わたし」

○「とれたはずだよ! 腰が高いんだよ!」ときつく注意される
○「ナイスファイト!」と笑いながら声をかけてくれる

人と接するときに大事にしていきたいことは何ですか。

明るく、笑顔
相手のことをよく考える。
人を傷つけない。
きつい言葉をいわない。
優しく接する。

授業の中で芽生えた価値観

持ちをを考えて行動していきたい」と今までの生活経験から考えた生徒もいた。授業前と同じ発問を生徒たちにしたところ、この生徒は始めに書いたものだけでなく、新たに「明るく笑顔」「相手のことを考える」「きつい言葉を言わない」「優しく接する」という4つのことを書いた。これより、本授業でこの生徒に新たな4つの考えが生まれたことが分かった。

（３）授業外での取り組みと生徒の姿（仮説４に対応）

生徒たちが授業の中で道徳的实践力を高めたら、それを生かす道徳的实践の場を与えたり、日常の中で教師が道徳とつながるきっかけになる支援をしたりすることで、授業での学びと日常生活が結びつき、道徳的实践へと動き出すようになると考えた。そこで毎年希望者を募って行っている「地域でのボランティア活動」と生徒会が自主的に企画した「あいさつ運動」の取り組みを紹介する。

①地域でのボランティア活動

本校では毎年、地域の福祉施設を訪問して行う「幸田町夏休み福祉体験ボランティア活動」を行っている。当日は受け入れてくださる学区内８か所の福祉施設に６０名以上の３年生（３年生だけで全施設の定員が埋まってしまったため１、２年生は参加できなかった）が訪問し、活動をさせていただいた。不慣れなことも多く、苦戦しながらも生徒は少しでも役に立とうと頑張る姿があった。

道徳の授業の中で高めた道徳的实践力を生かす場を、地域社会と連携し、つくっていくことで、実践の中での満足感や新たな学びを生徒たちが得て、新たな道徳的实践に動き出す生徒が育つと考えられる。しかし、今回せっかく道徳的实践力を伸ばしても、参加できなかった生徒も多数いる。これらの生徒の心を伸ばすためにも、社会とのさらなる連携をし、受け入れ施設を増やしてもらえるように働きかけていきたい。また、今後は部活動を通じて地域社会との連携を図る「福祉施設での演奏会」を検討中である。

②生徒会企画による「あいさつ運動」

前期生徒会役員の生徒から「北中三本柱（あいさつ、歌声、無言清掃）をレベルアップし、さらによい北中をつくりたい」という提案があった。その中で「授業前後のあいさつなど全員でやれるものはできるが、個人になるとできないこともある。だから生徒会役員が昇降口に立ち、あいさつ運動をやろう」という声のもと、あいさつ運動の取り組みが始まった。アンケート結果によると、「どの学年の生徒もほとんどは地域の人にもあいさつをしている」とあったが、生徒会役員があいさつをしても、恥ずかしがって小さな声でしか返さない生徒もいた。そこで、生徒会役員が給食時の放送を使って、「北中を良くするためにもっとみんなで頑張ろう」と呼びかけた。さらに「学年ごとのMVP」「今日の全校MVP」などを毎日放送で発表することで、あいさつへの意識が高まってきた。今まで大きな声でやれていた生徒は今まで以上に、恥ずかしがってしまっていた生徒もだんだん大きな声で行えるようになってきた。今後もこの活動を続け、どこでも、どんな時でも、誰にでもあいさつできる生徒が増えていくことを期待している。



さらに、「学校内だけでなく、地域にもあいさつを広めたい」という思いから、地域に出のあいさつ運動を企画した。今回は、学区内の小学校に依頼をし、小学校の校門前であいさつ運動を行った。児童の登校時間のピークと、生徒の活動可能時間がずれるなど課題もあるため、今後さらなる検討が必要である。

今回、生徒会役員が自分たちで、「あいさつ運動」を企画したことに道徳的实践力の高まりを感じた。このような場を設定することで、「あいさつは大事」と頭では理解しているが、なかなか実践できなかった生徒も実践へと動き出すきっかけになると考えられる。今後も生徒会の活動として、継続的に行っていきたいと考えている。

6 研究の成果と今後の課題

道徳の時間は好きだ					道徳の時間の学習を生活で思い出す				
回答1: そう思う					回答1: そう思う				
回答2: どちらかといえばそう思う					回答2: どちらかといえばそう思う				
回答3: どちらかといえばそう思わない					回答3: どちらかといえばそう思わない				
回答4: そう思わない					回答4: そう思わない				
回答1	回答2	回答3	回答4		回答1	回答2	回答3	回答4	
1年	47%	38%	10%	5%	1年	29%	42%	23%	6%
2年	28%	52%	15%	5%	2年	12%	46%	29%	13%
3年	25%	48%	16%	11%	3年	14%	43%	30%	13%

これは、今年度初めに行ったものと同じアンケートを12月に行った結果である。

この質問項目で「そう思う」と答えた生徒は

5月→12月					5月→12月					5月→12月				
道徳の時間は好きだ	1年	52%	→	47%	2年	26%	→	28%	3年	20%	→	25%		
生活の中で思い出す	1年	32%	→	29%	2年	14%	→	12%	3年	12%	→	14%		

と変化した。どちらの回答も大きな変化は見られない。しかし、1年生の値がこの一年間を通して大きく下がらなかったことが分かる。これまで、中学校での道徳の授業の中で「好き」とか「生活の中で思い出す」生徒が減っている状況が顕著に表れており、その改善のために「話し合いの時間の確保」や「テーマ発問」の設定、「生徒の意識を高める授業スタイル」、また「評価を工夫する」ことを実践してきた。今回の実践で、全体の「そう思う」割合を大きく上昇させることはできなかったが、中学校の道徳の授業を1年間受けた1年生が、5月と大きく変わらない結果だったことは、今回の実践の成果と言える。この1年生が2年生へと進級した際もアンケートを行い、データを蓄積していくことで、今回の実践の成果がはっきりしてくる。

また、右の資料17は教員の「評価の工夫をしている」という項目の12月の結果である。5月には「どちらかといえばそう思わない」「そう思わない」と答えた教員

評価の工夫をしている				
回答1: そう思う				
回答2: どちらかといえばそう思う				
回答3: どちらかといえばそう思わない				
回答4: そう思わない				
回答1	回答2	回答3	回答4	
教職員	34%	30%	28%	8%

が80%に上ったが、12月は36%と今回の実践を通して、工夫していると自信をもてた教員が大きく増えたことが分かる。ただ、実践を繰り返しても自信をもてずにいる教員が36%いるということは課題である。平成31年度の教科化実施に向けて、さらに研究を積み重ねていくことが必要である。

今回の研究では、ほっとタイムなどを通してかかわり合う力を身につけ、北中スタイルの授業実践、OPPシートによる評価で生徒の道徳的実践力を向上させ、道徳的実践の場を提供することで学びを生かすことを実践してきた。実践を繰り返す中で浮かび上がってきた課題は

- ①教材によっては「テーマ発問」では考えが集中し、きれいごとを誘導している授業になる。
- ②長い教材では場面発問を簡略化したことで、主発問での考えが深まらず、結果としてテーマ発問も深まってこない。
- ③道徳的実践を行いたくても、人数が多くなるほど受け入れてくださる施設が足りなくなり、実践を行えない生徒が増え、行おうという意欲が減少する。

の3点である。これらの改善のために

- ①「テーマ発問」だけでなく「問題解決型」「モラルジレンマ」など教材によって様々な手法を検討していく。
- ②教材によっては教材で十分に考え、自分につなげるために2時間完了の授業も考えていく。
- ③受け入れ施設を拡大したり、ボランティアなどの機会を増やしたりする。

この3点を中心に今後も研究を続けていきたい。